

2台のピアノ 弾む「JOY」

小曾根真 × 鈴木優人 対談

● 9月17日(土) ●

■小曾根真×鈴木優人×大阪フィル ひかれあうジャズと古典—2台ピアノの午後
午後3時、フェスティバルホール▽ピアノ：小曾根真、指揮・ピアノ：鈴木優人、大阪フィルハーモニー交響楽団▽ラベル「ピアノ協奏曲 ト長調」、モーツァルト「2台のピアノのための協奏曲 変ホ長調」、ムソルグスキー(ラベル編曲)組曲「展覧会の絵」▽S席7500円、A席6000円ほか▽協賛：朝日放送グループホールディングス、竹中工務店▽チケットはフェスティバルホール(06・6231・2221)ほかで発売中

● 8月9日(火) ●

■オペラ「泥棒かささぎ」(演奏会形式)(2021年6月5日に予定していた公演の振り替え公演)

午後2時、フェスティバルホール▽指揮：園田隆一郎、ステージング：奥村啓吾、出演：晴雅彦、福原寿美枝、小堀勇介、老田裕子、青山貴、伊藤貴之、森季子、清原邦仁、西尾岳史、片桐直樹、関西在住のソリスト陣による特別編成の合唱団、大阪交響楽団▽2021年6月5日のチケットで入場できるほか、再発売中。S席8500円、A席7500円ほか▽協賛：朝日放送グループホールディングス、関電工、ダイキン工業、大和ハウス工業、高砂熱学工業、竹中工務店、西原衛生工業所(レクチャーコンサートも協賛)▽チケットはフェスティバルホール(06・6231・2221)ほかで発売中



園田隆一郎
©Fabio Parenzan



老田裕子

● 6月22日(水) ●

□関連企画①「オペラ『泥棒かささぎ』レクチャーコンサート」

午後2時、ザ・フェニックスホール▽司会とお話：朝岡聡(日本ロッシェニ協会副会長、東京芸大客員教授)、出演：園田隆一郎(指揮者)、老田裕子、青山貴、伊藤貴之、岡本佐紀子(ピアノ演奏)▽2500円(当日座席指定)、定員100人▽申し込み：フェスティバルホール(06・6231・2221)



朝岡聡

● 8月8日(月) ●

□関連企画②「オペラ『泥棒かささぎ』リハーサル見学会」

午後2時半～5時半(予定)、フェスティバルホール▽お話：朝岡聡▽2750円(当日座席指定)、定員100人▽申し込み：朝日カルチャーセンター中之島(06・6222・5224)



伊ヶ崎 崎 撮影

おぞね・まこと 1961年、神戸市生まれ。83年、米パークリー音大を首席で卒業し、同年、米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び全世界デビュー。2003年グラミー賞ノミネート。21年に選歴を迎え、「OZONE60」と題したプロジェクトを全国で開催。

すずき・まさと 1981年、オランダ生まれ。東京芸大大学院及びオランダ・ハーグ王立音楽院修了。現在、パッサ・コレギウム・ジャパン首席指揮者、読売日本交響楽団指揮者/クリエイティブ・パートナー。NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演中。九州大客員教授。

同じメロディー 違いが出る面白さ

演奏会の幕開けは、ラベルの「ピアノ協奏曲」。独奏の小曾根は「わあ、(モーツァルトと)どっちも好きな曲だから、ぜひ」と即答したそう。「大好きだけれど、これも勝手にいじれない。第2楽章のあの後ろのアルペジオのラインとか、ものすごく

きれいだから」。鈴木も「第1楽章冒頭のパーンって音。シャンパンが開いたみたいなあの音は、イノベーションですよ」。続くモーツァルトの「2台のピアノのための協奏曲」は、鈴木が第2ピアノ、小曾根が第1ピアノを弾く。指揮もつとめる鈴木

ジャズの最前線で活躍するピアニスト小曾根真と、バロック演奏の旗手で指揮者の鈴木優人。2人がこの秋、「第60回大阪国際フェスティバル2022」(朝日新聞文化財団、朝日新聞社ほか主催)で初共演を果たす。大阪だけの夢の舞台を前に、初の対談が実現。ノンストップで言葉が弾む時間となった。(尾崎千裕)

小曾根 もうびっくり、わくわくですね。(共演を聞いて)えっ、僕でいいんですかって。

鈴木 いやいやいや。

小曾根 クラシックの世界に呼んでいただく時は、いつも綱渡り。とはいえ、人前でクラシックを弾き始めて20年近く経つので、「始めたばかり」とも言えず、毎回ふんどしを締め直して挑むしかない。

鈴木 僕も、びっくりですよ。モーツァルトの2台ピアノを小曾根さんとどなんて。どうなるのか、と思って。

小曾根 知らんよ。知らんよ。

初共演でも怖くない

鈴木 でも、「怖い」という気持ちが一切なかった。

小曾根 ああ、それはうれしいな。

モーツァルトは2003年に、忠さん(指揮者の尾高忠明さん)が声をかけてくださって札幌交響楽団でオケと初めて弾いたんです。それまで、楽譜に書いた音楽には縁がないと思っていました。モーツァルトの音楽自体、ジャズに比べるととてもシンプルで、どこかつまらないとさえ思っていたんです。でも、(ピアノ協奏曲)9番を初めて弾いたとき、第1楽章の展開部で涙がポロポロ出てきちゃって。「なに、この人」「たった8小節で、どうして月から火星に行き、木星まで行って帰って来られるんだ」と感動しました。

鈴木 ジャズは、演奏と楽譜の距離感が癒着していない。その感じがいいんですよ。クラシックは癒着している。楽譜イコール演奏だと思っているから。正確なリズムや指の動きばかり、とやかく言うじゃないですか。

バロックも、ジャズに近いと言えばそんなんです。通奏低音は即興で弾くし、コードとタイムが大事で、何を弾くかは、順位としてその下というか。

でも、ピアノの教育現場では逆だと思うんです。僕は小さい頃、ピアノでパッサをきっちりやらされて。家ではお父さん(指揮者で鍵盤奏者の鈴木雅明さん)がチェンパロでパッサを好きなように弾いている。

その矛盾がすごくて。最近ですよ、ピアノがどんどん好きになってきた。だから、小曾根さんもそうですし、ジャズの人々の楽譜そのものへの距離感がすごく好きです。

僕は実はオフタイムは、ほぼジャズしか聴かない。

小曾根 その話を聞いて、びっくりした。僕らにとって、楽譜は結局設計図なんです。設計図をいただくから、それにのっかって弾くんですが、時々、今日はこの辺に煙突をつけてみよう、とかね。

鈴木 設計図、いいですね。

小曾根 僕はこの前、(ジャズクラブの)ブルーノートで初めて鈴木さんのチェンパロを聴かせていただき、感激してね。

鈴木 いきなりオファーがきて、衝撃でした。僕にとっては「逃げ場」というか、音楽を聴きたい時に聴きに行く場所であり、まさか自分が舞台側に行くとは。で、終わったら、カウンター席に小曾根さんが座ってるという、ダブルの衝撃で。「なんているんですかー」って。

小曾根 多分、鈴木さんもそうだと思うんですが、興味が湧くと止められない。もう、我慢ができなくて、どうしても食べてみたくなる。

鈴木 そう、怒られます。

ハプニング含めて生

小曾根 いくら配信のレベルが高くなっても、生のコンサートにはかなわないよね。ハプニングも含めてコンサート。携帯が鳴っても、「魔物よ、今日はそこにおったか、お前」みたいなね。怒ったら負けなんです。そういう意味では、鈴木さんに胸を借りて好き放題弾かしてもらおう。

鈴木 いや、こちらこそ。でも何が起きても、小曾根さんは絶対怒らないだろうな。まとめる力というか、音楽にする力がある。

小曾根 これだけインスピレーションが湧くってことは、音楽をやる上での「JOY(ジョイ)」をもう腹の中でわかり合っているから。わくわく、ジョイしかない。

鈴木 確かに、ジョイしかない。いま、しゃべっているだけでもどかしい。早く一緒に弾きたいですね。

木は「同じメロディーを2人が弾いても、当然、違う弾き方になる。そこがやっぱり面白いはず。この曲に指揮者は本来いないと思うので、なるべくオケとのライブなリアクションでやりたい」と話す。

後半は、そのラベルが編曲したムソルグスキー「展覧会の絵」で締めくくる。演奏する大阪フィルハーモニー交響楽団との共演も、鈴木にとっては感慨深い。

実は、コロナ禍で演奏会がすべてストッ

プした一昨年、6月に大フィルが生の演奏会を再開したその公演をフェスティバルホールで聴いていた。「もうあの時の感動っていったらね、言葉にならない」。あの瞬間を思い出す同じ場所で、大フィルと3度目のタッグを組む。「小曾根さんのコンチェルトが2曲もあって、きっと、フェスティバル感も最高な一日になると思います」